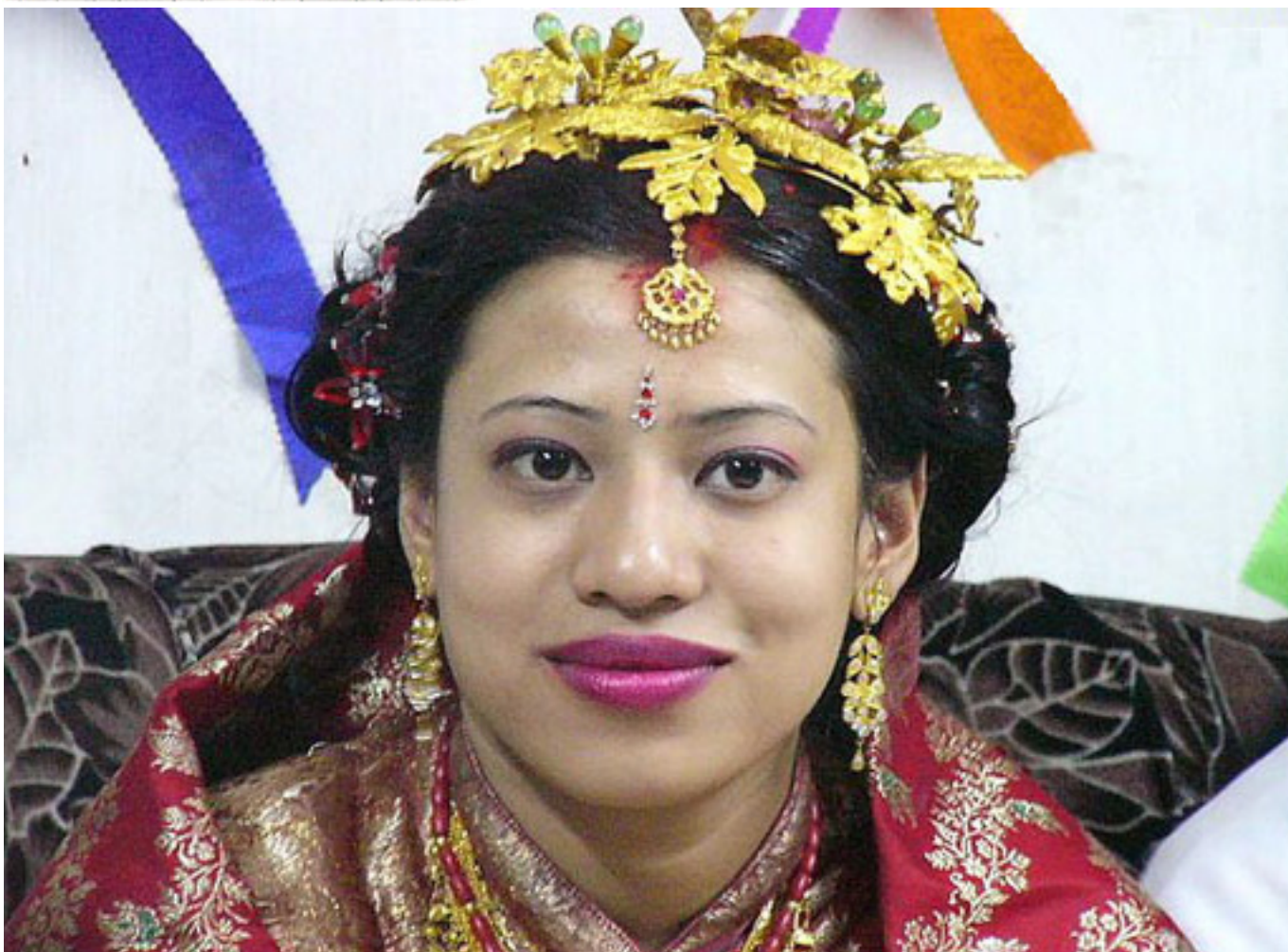




123号
2007 / 5 / 1

日中文化交流市民サークル 'わんりい'
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



〈ネパールの花嫁〉 2006年3月/ネパールカトマンドウにて

撮影：シャキヤ・ブンニヤ・ラトナ

‘わんりい’123号の主な目次

北京雑感その(14)「北京の自動車産業」	2
私の調べた四字熟語(11)「画龍点睛」	3
松本杏花さんの俳句集「拈花微笑」より	3
陕北女娃「通学路-1」	4
中国を読む(41)「38℃ 北京SARS医療チーム「生と死の100日」	7
【活動報告】「北朝鮮の夏休み」上映会	7
四姑娘山・写真便り-1	8
私の四川省 一人旅(6)「稻城へ…」	10
太郎の図書館を作りたい(X)	12
スリランカ紹介(7)「カシューナッツ娘」	14
【活動報告】「何媛媛さんと餛飩餅…」	15
「餛飩餅」レシピ	15
‘わんりい’掲示板	16

♪♪「中国語で歌おう!会」5月の歌♪♪

故郷はどこですか

「小村之恋」 指導：趙鳳英

(作詞：庄奴 作曲：薄井須志程)

*テレサテンによって歌われた美しい故郷への望郷の歌
歌詞を9pに掲載しました。

於：まちだ中央公民館7F・ホール

JR横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分町田
東急裏109ファッションビル7F

5月11日(金) 19:00 ~ 20:30

録音機をお持ち下さい。

*5月は、あさおサークル祭りでも「中国語で歌おう!会」
の特別公開講座が開催、「幸せなら手を叩こう!」を
中国語で歌います。皆様のご参加をお待ちしていま
す。詳細は、16P ‘わんりい’掲示板をご覧ください。

●「中国で歌おう!会」於：まちだ中央公民館

毎月1回、主として第3金曜日開催 19:00 ~ 20:30

会費(月1回): 1,500円 体験無料

会場、日時など事前に下記事務局へお問合せ下さい。

Tel 042-734-5100

「北京の自動車産業」と言っても、生産者側の話ではありません。自動車購買者側の話です。中国人の友人が、2005年末に自動車を買いました。そのときの状況が、日本とはかけ離れていたの、ちょっと紹介してみようと思います。もっとも、中国の社会情勢の変化はとても早いので、今は少し違うかも知れませんが。

新聞報道によると、中国の自動車保有台数は、アメリカに次いで世界第二位になったようですが、このことは、半年毎に北京に来る私のような人間には、目に映る景色として十分納得できる情報です。6年ほど前には、多くの自転車車が車道を走り、自動車は僅かな公用車・私有車だけでした。それが、年を追う毎に自家用車が増え、それに連れて自転車車が少なくなって来ました。現在では、片側5車線も6車線もある広い幹線道路が車で埋め尽くされ、しばしば交通渋滞を引き起こしています。日本の狭い道路ならいざ知らず、こんな広い道路でどうして渋滞が起こるのだろうかと思議ですが、これは、自動車の数が増えたばかりでなく、交通ルールや運転手のマナーにも原因があるようです。

しかし、それはさておき、自動車台数の増加は本当に目覚しく、北京のこんな様子が、上海や深圳・広州でも見られるとしたら、世界第二の自動車保有国というのも、実感出来ます。そのことを一番強く感じるのは、住宅の周りに駐車する自動車の数の増加です。4年前までは、清華大学校地内の住宅周辺に駐車する自動車は殆どありませんでした。それが3年前になると、ちょっとした空き地には必ず3、4台の車がおかれ、「北京にも車が増えてきたなア」と感じましたが、去年は、とうとう、住宅の周りに白線で仕切った、公認の駐車場が出来て、びっしり車が並んでいました。大学構内の住人の駐車は無料ですが、場所が決められていないので、住まいの近くは早い者勝ちだそうです。

紫竹院近くの、私が暮らすマンションは、地下に大きな駐車場を備えているのですが、料金が高いので入庫する人は少なく、外周道路に駐車するので、周りはいつもごった返していました。去年行ってみると、マンション敷地内の遊歩道に車が駐車して、車の横を人間が通行したり、散歩したり、小さい子供が遊んだりしていました。マンション管理会社が、住民の車を、地下駐車場よりもずっと安い料金で駐車出来るようにしたためですが、全住民の同意を取り付けていないので、この措置に反対する人々も大勢います。実際、以前はゆったりし

ていた中庭の通路にまで車が並んでいて、雰囲気がいささか悪くなりました。中国では、分譲マンションも土地は70年の借地権だけなので、中庭や通路などの共同使用部分が、日本の使用権分譲とは違うのかも知れません。「ある時、住民に何の断りもなく中庭に車が駐車するようになった」と、車を持たない人は勿論、車所有者の一部も、管理会社のこの措置には反対をしています。一旦許可された駐車は、なかなか取り消しが出来ないようです。

市の中心部では、自転車を通る路側帯の片側や、甚だしい時には、歩道にも駐車スペースを作って有料駐車場としています。この様な駐車場は、出し入れに不便だけでなく、歩行者を危険に晒します。北京の人々は、自家用車所有の便利さを享受すると同時に、それに伴う不便さにも直面し始めています。

それでも、人々は自動車を買い、通勤に、ビジネスにと活用しています。北京では、まだ行楽に車を利用することは少ないようで、土曜・日曜は、ウィークデイに比べて、車の交通量は若干少ないようです。でも、最近では小型車が売れるようになったとのことですから、いずれ、若い人達が自家用車を行楽に使用するようになることでしょう。

北京では、自動車の販売方法が、日本とは大分違います。街中にあるメーカーのショールームにこそピカピカに磨き上げた新車が展示されていますが、郊外の販売店が集中している場所では、表側にメーカーのショールームがあり、室内に2、3台のモデルを展示していますが、外には、舗装もしていない地面に砂埃を被った新車がいっぱい並べてあり、周りに個人経営の販売店があって、ショールームから出てきた客に声を掛けて、机と椅子だけの事務所に連れて行き、メーカー価格よりもぐっと安い価格を提示して客の購買意欲を掻き立てます。

どんな車種も扱っていて、自分が持ち合わせていない車種を見たいというと、電話で仲間に連絡を取り、そこまで案内して内部を見せます。仲間も持ち合わせていない車種の時は、そのあたりに停めてある該当車を探して、外側だけを見せたりもします。この場所は、メーカーの共有モータープールで、ブローカーが、周りで事務所を構え、ディーラーとして機能しているようです。

こんな場所を何箇所か見て周り、友人は新車を購入しました。彼女が、どのようにして新車を手に入れたか、どんな車が来たかは、次回お話ししましょう。

「素晴らしい作品なのに、画龍点睛を欠いていて惜しいですね。」絵画の展覧会などでこんな会話が交わされているのを聞くことはありませんか。

画龍点睛は「がりゅうてんせい」とも読みますが、「がりょうてんせい」が正式の読み方です。「龍」を「りゅう」と発音するのは「慣用音」、「りょう」は「漢音」です。また「睛」は晴と書き誤りやすいので要注意です。上記のように「画龍点睛を欠く」の形でよく用いられます。ちなみに、「点睛」とは、瞳を描き入れることです。

辞書を調べてみますと、

三省堂「現代国語」には、「画龍点睛：ものごとの最後に加える大切な仕上げ。「画龍点睛を欠く」正しくは、がりょうてんせい。龍をかいて、最後にひとみを書き加えたら、その龍が天にのぼったという、中国の故事から。]

小学館「中日辞典」では、「画龙点睛 huà lóng diǎn jīng：文章を書いたり話しをしたりするとき、肝心な締めくくりとなることばを一つ二つ付け加えて全体を引き立たせること。」とそれぞれ説明されています。では出典を調べてみましょう。

出典は「歴代名画記（脚注参照）」です。

（「水衡記」が出典との説もありますが、ここでは「歴代名画記」が出典であるとの立場をとるものとします。）

南北朝の時代、南朝の梁の国の武帝は、仏教を厚く信仰していました。たくさんの寺を建てて、寺の装飾画の多くは張という画家に書かせていました。あるとき彼は、金陵（きんりょう 現在の南京）の安楽寺の壁に龍を描くことを頼まれ、4匹の白い龍の図を描きました。その龍は、今にも壁を突き破って天にも昇りそうな勢いがあり、見る人すべて息を飲みましたが、不思議なことに、どの龍にも、睛（ひとみ＝瞳のこと）を書き入れませんでした。不思議に思った人々が彼に理由を尋ねますと、彼は「もし、この龍に瞳を書き入れたら、飛んでいってしまうからだよ」と言いました。人々は信じることができずに、是非、瞳を描き入れるように彼に求めました。

張はしかたなく願いを受け入れて2匹だけ絵の龍の瞳を書き入れました。

するとたちまち稲妻が走って壁が壊れ、2匹の龍は雲に乗って天に飛び去ってしまったのです。あとには瞳を書き入れなかった2匹の絵だけが、今も安楽寺の壁に残っています。

〔注記〕 歴代名画記

晩唐、853年頃、絵画史家 張彦遠（げんえん）が中国の従来の画論画史を集大成したもの。黄帝の時代から唐まで373人の名画家を挙げている。その中に梁の画家、張僧繇（ちょうそうよう）の名があり、上記の話が述べられている。

私が調べた四字熟語 12

三澤 統

松本杏花さんの俳句《拈花微笑》より

鑑真像都の大銀杏空一面の芽吹きかな

qiān zài jiàn zhēn xiàng
千載鑑真像
jīngdū shù mù xīn yá cháng
京都樹木新芽長
chūnyì nào rǎngrang
春意闹嚷嚷

季語：新芽、春。

叁天的银杏树繁枝吐芽、象征着古木逢春的勃勃生机。可以想像出、这苍老的树干和娇嫩的芽尖之对比是多么强烈。而作为生命的同一体、二者相互依存、又是多么和谐统一。沙声响、作者索性泊宿在这里、品味这里的安适。此时此刻、心境若不佳好才怪呢！

アカシヤの香をきく宿に安らげり

cǎihuā cìyǎn huáng
菜花刺眼黄
jīngzhé xié dǎo réng shàng cháng
茎折斜倒仍上长
jīngshen wǒ jì yáng
精神我继扬

季語：菜花、夏。

洋槐开花时香气四溢、会招引蜜蜂来采蜜。不仅如此、这香气还诱来了作者。

大自然的气息赛过一切人工合成的香水味。为了嗅得洁白的洋槐溢出来的青香、聆听夏风吹拂簇簇繁花和碧碧青叶发出的沙沙声响、作者索性泊宿在这里、品味这里的安适。此时此刻、心境若不佳好才怪呢！

黄土高原ど真ん中の延川県土崗郷、黄河が大きく湾曲するところに伏羲河村と呼ばれる村があります。歴史的な伝承があるこの村は、住んでいる人は多いのですが土地は狭く、耕地は殆どありません。それで昔からずっと黄河の砂洲を利用して棗の木が植えられて来ました。有名な“灘棗(砂洲棗)”の産地です。

伏羲河村の人は全部「郭」姓を名乗り、「郭」姓も又いくつかに分かれています。古に遡れば全て伏羲氏に関わりがあるということです。“清道光本”(延川県志)には「古代、人類の始祖である伏羲氏がかつてこの地に住んでいた。伏羲河村は清代以前は伏羲河村と呼ばれていたが“羲”と“义”の繁体字“義”は形が似通っているののでいつの間にか“義”を用いて表記するのが慣わしとなって今に至っている」と記載されています。



1997年以来これまでに私が伏羲河村を訪れた回数は数え切れません。村にはよく知っている子供たちが大勢おり、彼等の学習や生活環境など全てに亘って良く知っています。特に2001年4月から2003年5月の間、私は延川県文化局で仕事をする事になり、併せて当県の最僻地である郷鎮であり土崗郷の、しかもその土崗郷の最僻地の村落である伏羲河村を重点支援地として、私は毎月この村を訪れる事になったのです。子供たちの一挙一動が私の心を刺激し、子供たちの行動や言動、思いや願いの全てを私のカメラのレンズを通して、外界の友人達に知らせたいと思うようになりました。



伏羲河村は土崗郷の役所から20キロメートル以上

離れ、途中いくつも丘や谷を越えなければなりません。大人が徒歩で往復するのでもかなりの労力ですから、まして12～3歳の女の子達にとってはいかばかりでしょう。

実は、土崗郷全体で完全小学校(1年生から6年生までで全学年が揃う小学校のこと)は一箇所しかないのです。子供たちはそれぞれの村の小学校で2年生(村によっては3年生)まで勉強し、その後は郷の小学校に寄宿し勉強をすることになります。毎週、子供たちは教科書ばかりでなく、一週間分の食事——ずっしりと重い酸菜(漬物)と一週間分、9回の食事(1日当たり2食4日分と金曜日朝の食事用。金曜日の午後は帰宅——を背負って学校へ通うことになるのです。寒さ厳しかろうと焼け付く暑さであろうと、風が吹こうと雨が降ろうと、毎週繰り返されることなのです。

土崗郷では私はそんな子供たちによく出会います。みんなほほを真っ赤に染め、息をはあはあさせて道端にしゃがみ込んで休んでいたります。かわいそうなのは3年生になったばかりの11～2歳の子どもたちで、泣こうにも声も出ない様子です。

私は子供たちと一緒に学校まで歩き、学校に通う子供たちの途中の様子を記録しよう決めました。そして、よく知り合っている伏羲河村の子どもたちを撮影の対象に選びました。



2003年3月2日は子供たちが学校に戻る日です。夜が明けると私は先ず小芳の家に行き、「学校に行くときは必ず声を掛けてね」と念を押してから、私は安心して村

の中を巡りました。というのは、私は前日、小芳、芳芳、慶慶の家を訪ね、彼女達が学校に行く前の準備をしている写真を撮影し、一緒に行くと伝えておいたからです。この子たちは皆、私が数年に亘って撮影して来た子供たちですが、この子供達が伏羲河村小学校を終えて郷の小学校に行くようになった後の写真がありません。



午前9時前に朝飯を食べ(ここでは1日2食です)ましたが連絡がきません。それで私は船つき場でお喋りでもしようと思っけ、今回の目的は子どもたちが学校に行く様子を撮影することだと伝えますと、おばあさんが「学校に行く子はもうとっくに家を出て今頃は土崗に向っちゃってるよ」と言うではありませんか。

時計を見ると9時前です。入り口で待ちましたが誰も私を呼びに来ません。心配していると丁度何人かの子どもたちが朝ご飯を済ませて学校に行くのに出会い、その中に慶慶の妹もいました。訊くと「慶慶たちはもう出かけたよ」という答えが帰ってきました。私は瞬時ぽかんとあっけに取られ、すぐ面白くない事態になったことを知りました。子ども達の通学の姿を撮影にわざわざ来たというのに収穫なしで戻るわけには行きません。

私は慌てて小芳の家に行き、庭にも着かないうちから大声で小芳を呼びますと、窑洞の中から、「子供たちは1時間ほど前に出発したよー」という返事です。頭の中が真っ白になりました。何日も掛けてあれこれ計画を練ったというのに一瞬のヘマで大切な機会を失ってしまったのです。

後悔している場合ではありません。直ぐ家に駆け戻り、カメラやビデオを背負うと、家主に「私は一足先に行く。一緒に行く仲間が来たら私のリュックと三脚を背負って追いかけて欲しい」と伝言を頼みました。話しながらも入り口を飛び出し、三歩の距離を二歩に、そして小走りで走り出しました。



近道を選び、がけ道を抜け山を走りました。疲れが足

から力を奪い、息が切れます。試しに幾声か大声で呼んでみましたが返事はありません。みんな遠くに行っちゃまっているのです。若し彼等が‘捷路砭’と呼ばれている切りたった崖道の古棧道を通り抜けていたら、今回撮影しようとしている一番精彩のある部分を失ってしまい、全行程追跡撮影の意義は大打撃を受けてしまいます。



岩の壁と黄河にはさまれた崖道を行く

私は息を弾ませて追いかけて、遂にもう直ぐ山の頂上というところでこちらに向って駆けてくる男の子に出会いました。私は救いの星に出会ったように大声で彼を呼び、前方に行く子供たちに停まるように叫ばせました。しかし、男の子は「もう遠くまで行ってしまっているのだから見えない」と言い、家に鍵を取りに戻るところだそうで飛ぶように走って行きます。自分の散々な苦勞の様を思うにつけなんと羨ましいことか!年齢はどんな人も見逃さないのだため息をつくばかりです。



両足を引きずり上げてやっと山の頂上に出ると、頂は広く広がって平坦な道が続き走れるようになりました。しかし私は両足に鉛を注ぎ込んだようで動かすのさえやっとなです。どこに走る気力があるといえるでしょう?歯を食いしばって大急ぎで歩くしかありません。

幸い3回曲がり角を廻ったところで二人の子どもの

後姿が見えました。私は大声で「停まって!」と叫び、近づいて見るとそれは翻翻の二人のお姉さんで彩琴と転琴でした。転琴は木の枝を杖にしています。朝、小芳の家を訪ねて行ったとき、小芳のお母さんが、風邪を引いて頭が痛いからとこの子のお尻に注射を打っていたのを思い出しました。街に住んでいればこの子は今日はき



と休んだに違いありません。しかし、ここでは我慢するしかないのです。皆と一緒に学校に行かなければ間違いなく1週間の学習過程に遅れが生じてしまいます。

やっと‘捷路砭’に差し掛かり、遂に二段になった‘捷路砭’の入り口辺りに石の崖路をゆっくり歩く幾人かの人影がかすかに見えてきました。彩琴は目ざとく、彼等は慶慶、芳芳たちだと見分けました。私は直ぐ大声で呼ばわり、子供たちは遂に停まりました。‘捷路砭’に入る時、彩琴と転琴は「怖い！ 回り道をして車道を行きたい」と言いました。

実は、私も内心、びくびくものでしたが無理に心を奮い立たせて「大丈夫。私に付いておいで」と言い、先頭に立って薄暗く湿った石の栈道を進んで行きました。道幅は1メートルもなく砕けた石がごろごろしており、片側は切り立った崖、もう一方は万丈の淵、しかもこのでこぼこ道は外側に傾斜しているではありませんか。

足の下には黄河の流れがとうとうと逆巻き、氷の塊がどどどどんと音を立てて上流から流れ来ては、いつでも仲間になろうよと誘っているかのよう、流れ去って行きます。足から力が抜け、眼がチカチカします。少しでも注意を怠れば転げ落ちて身体も骨も砕け散ってしまうでしょう。私は外側を見る勇気がなく、ちらりと眺めては心胆震え上がり、眼はひたすら内側を見るようにし、身体も内側に傾けて歩きました。

しばし歩いて路がやや広くなってから、二人の子どもを呼んで先に行かせ、自分は後ろに廻りました。私の仕事は撮影することで、探検に来たのでも、刺激を求めてきたのでも勇気を鍛えるために来たのではないのです。



遂に一つ目の‘捷路砭’を通り過ぎました。二つ目は一つ目の道より更に危険で、子供たちは入り口のところで待っています。退却は出来ません。歯を食いしばっても行かなければなりません。

路面は風化した小石が一面に散らばって、一歩ずつ

確実に足を踏み出さなければ転んでしまうでしょう。若しここで転んだら笑い事ではありません……最も緊張を強いられるところは石崖が道の上に低く垂れ下がったところで、ここでは高貴の人でも身体を前に屈めて進まなければ通れません。

見ると子供たちはなかなかで、猫背にもならず、身体を外側に傾け、まるで猿のようにするすると潜り抜けて行きました。身軽ですばしこくまるで黄河の上空に弧線を描いて路か小道があるかのようです。

私は写真を取りながら進み、時には子どもたちと距離を置いたり、また子供たちを大声で呼んで立ち止まらせたりしては狙いを定め、カメラを構え撮影しました。実は息が切れるので、写真撮影するといつて一息入れ元気を取り戻そうという魂胆なのです。

事ここに至れば、いかんせん腰を丸め、膝を曲げ、屈みこみ、歩幅を小さく、ゆっくり進んでいくしかありません。崖の上で私が辿り着くのをずっと待っている子供たちの笑いさざめく声が耳に聞こえてきます。「怖がってらあ、怖がってらあ」。中でも慶慶の声は一際高く響いています。



‘捷路砭’を通り抜け、私は徐々に石崖の上の平坦なところに出て呼吸を整え、気持ちも落ち着かせることが出来ました。とうとう子供たちの大隊に追いついたのです。とても嬉しくはありましたが、子どもたちに恨み言の一つも言いたくなくなります。

「一緒に行くって言ったでしょう。どうして出発する時知らせてくれなかったの？」しかし、子供たちは私が彼等と一緒に学校に行くなんて“誑哩”(冗談の意)だから、ほんとだと思わなかったといいます。外から来た人間が何で子どもといっしょに学校まで歩いてゆくの、子供も親も分からなくて当然です。40里(約20km)もある山道です。村の大人達もあまり歩かないというのに、街から来た役人が歩くはずがあるのでしょうか？ (田井記)

38℃ 北京SARS医療チーム 「生と死」の100日 麻生幾著 新潮社



2003年に世界を震撼させたSARSは、日本にはやってこなかった安堵感で収束した(ように、少なくとも私には思われた)。

しかし、海を挟んだすぐ隣の国ではSARSとの壮絶な戦いが

繰り広げられていたことを、この一冊は教えてくれる。

感染症がやっかいなのは、看病にあたる医師、看護師が同じ病気になる可能性を多分に秘めていることだ。そのため、宇宙服のような防護服で身を包み、医療作業を行うことになる。ただでさえ繊細な動きが求められる行為を、ゴーグル越しの視界のなか、グローブをはめた手で行わなければならない…。

ゴーグルは汗で曇り、グローブが手の動きを制限する。そして、何より、自分も感染するかも

しれない恐怖! 看護中に、その恐怖から失神するナース、ノイローゼ気味になる医師たち。毎日押し寄せる患者の波に揉まれて、忙しさのあまり恐怖を感じる暇さえなかったと語る看護師もいた。殉職した医療関係者も多い。

著者は2003年7月6日に中国を訪れ、取材を敢行している。SARSとの死闘の記憶がまだ生々しい北京で16名の関係者に話を聞き、現場を見ることは、きつい仕事だっただろう。患者から感染し亡くなってしまった看護師の夫は、感染してから妻に一度も会うことはできなかった、と語る。

妻が入院した病院に入ることはもちろん、その遺骨も受け取ることはできなかった。詳細な情報は何も知らされず、死だけが告げられる。SARS対策の最高責任者は、友人からのメールに支えられて修羅場をくぐりぬけた。そのため、未だに携帯電話を手から話せず、取材中も始終携帯電話のディスプレイを確認せずにはいられなかったという。彼の心に、SARSは巣くった。

感染の恐怖と一緒に、現場で戦った医者と言う。「危険な仕事がある。それは誰かがやらなければならない」。恐怖よりも強い気持ちがウィルスに勝利した。(真中智子)

【活動報告】

「北朝鮮の夏休み」(監督・任書剣 2004年 73分)上映会
2007年4月19日(木) 於：町田中央公民館視聴覚室

今回で3回目になる上映で、しかも平日の夜の上映。参加者数が心配されましたが、26名の参加があり、任書剣さんとともに1泊2日の北朝鮮の旅に参加し、テレビや新聞では報道されない北朝鮮の人々に接しました。

北朝鮮という国のありようを認める訳には行きませんが、個々の人々は、素朴で一生懸命で、勤勉です。しかし、若い女性の理想の男性像が国際的な物議の元凶ともいえる金正日だったり、人々が金日成の巨大な銅像に敬意を以って対したり、幼稚園の子ども達が「敵が来た! 戦え! 戦え!」と歌うのは、人々の忠誠心を煽る北朝鮮の教育の恐ろしさであり北朝鮮という国の怖さです。そういえば昔は日本もそうでした…。

韓国のニュース(4月21日)によれば、北朝鮮では最近、平壤をはじめ北朝鮮内各地に金日成キム・イルソン主席と金正日キム・ジョンイル総書記を偶像化する巨大なモザイク壁画や革命史跡碑などを相次ぎ建設しているとのことです。

(田井)

‘わんりい’のおたより会員継続の
お願いとお誘い

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

毎年、4月は‘わんりい’おたより会費更新月です。継続会費(1500円/年)の納入(上記)をお願いします。新規入会も歓迎します。

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催しています。また、2月と8月を除いて年10回、会報 ‘わんりい’を発行しています。

入会はいつでも歓迎しています。会費は、おたより制作費と送料及び活動のサポートに当てられています。活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

四姑娘山・写真だより No.1 四姑娘山の朝焼けと山神のお祭り

大川 健三
四姑娘山自然保護区管理局 特別顧問

中国 四川省 アバ藏族羌族自治州 小金県 日隆鎮 長坪村に住み、中国四姑娘山自然保護活動を続けていらっしゃるプロの写真家・大川健三さんから、折々、四姑娘山・写真便りを頂けることになりました。昨年及び一昨年と、'わんりい'のメンバーの何人かが、大川氏の案内で四姑娘山を訪れていることから'わんりい'メンバーとの親交を深めています。

四姑娘山につきましては、'わんりい'HPページに詳細があります。



写真1 四姑娘山主峰(6250m)朝焼け

ヒマラヤ横断山系に重なる東チベットには6000～7000m級の山が数多く聳え、これらの山は古代から神が宿る所として信仰されています。四姑娘山もその1つで、**写真1**は主峰6250mの朝焼けです。このような神々しい姿を見ると、撮影している時にお祈りしたくなります。

四姑娘山の麓に在る日隆の町では、陰暦5月4日(今年は陽暦6月18日)にこの山神を祭って踊りを捧げたりその年の豊潤を祈る風習(煙祭献馬節)が今も続いています。この神に捧げる踊りを「鍋庄」と言いますが、その踊る場所が町の東側の四姑娘山南稜の末端に在る鍋庄坪の丘です。(鍋庄坪は漢名で地元のチベット名は神台を意味する「dantsosuda」です)ただ現在では殆どの踊りが観光客を意識して今風にアレンジされていて、古来からの伝統的な踊りは少ししか見れません(昨年8月に'わんりい'の方々が丹巴でご覧になった踊りは古来からの伝統的な踊りですが、



地域によって微妙に違います)。写真2は民族衣装を着てこの踊りに集まったチベット族の人達で、写真3はお祈りの様子です。

お祈りの回る方向は、ギャロン¹⁾全体ではボン教²⁾の左回りが多数派ですが、チベット仏教ゲルク派³⁾の影響が強い四姑娘山界限では写真のような右回りが少なくありません。

陰暦5月4日頃は降雨量が多い時期で、鍋庄坪の丘に花々が咲き始める時期でもあります。そして四姑娘山に降ったこの雨は山谷の緑やヤクの喉を潤しながら流れ落ち、幾つもの支流を経て長江に注ぎます。



写真2 民族衣装を着てこの踊りに集まったチベット族の人達

註1：ギャロン：嘉絨 (Jiarong)

中国四川省甘孜州丹巴県やアバ州馬爾康県・金川県周辺のあたりの地域。大川氏のHP「ヒマラヤ横断山脈の女王谷」によれば、その名の語源はチベット語の“rGyalmorong”で女王の谷を意味する言葉に依るとのことです。

ここに住む人たちは中華人民共和国成立後の民族識別によってチベット族に属すると認定され、特にギャロンチベット族と呼ばれています。

商王朝の時代、青海省、甘肅省付近で放牧を営んでいた羌族が殷や秦の圧迫から岷江などの大河沿いに南下しその流域に定住するようになった人たちが祖先とも、モンゴルに滅ぼされた西夏王国から逃げてきた人たちの末裔という説もあり、古代から多くの民族が移住して先住民と融合し、今日に至っていると考えられており、チベット人とは異なる言葉話し、誇り高い民族のアイデンティティと独自の文化を伝えています。



写真3 お祈りの様子

註2：ボン教

チベットの宗教の一つで、シャーマニズム的な民族宗教から発しており、チベットのカム、アムド、西チベットや北ネパールのトルボに存在しています。古代にチベットを支配した吐蕃王朝の宗教でしたが、7世紀の仏教伝来以降は仏教と結びついた政権によって弾圧を受け、仏教化されました。中国本土では「黒教」と呼ばれ、日本でお寺のマークとして知られている卍は本来ボン教の記号。仏教と対立し競合する

うちにチベット仏教のニンマ派と区別がつきにくくなって、その違いは寺院の中を巡る際に右回りをする仏教徒に対し、ボン教徒は左回りする程度です。

註3：チベット仏教・ゲルク派

チベット仏教最大の宗派でダライ・ラマを頂点に頂きます。中国では「黄教」と呼ばれています。

五月の練習曲 〈小村之恋〉

作曲：薄井須志程 作词：庄奴

wānwān de xiǎohé qīngqīng de shāngǎng
弯弯的小河 青青的山岗
yīwēi zhe xiǎo cūnzhuāng
依偎着小村庄
lán lán de tiānkōng zhènzhen de huāxiāng
蓝蓝的天空 阵阵的花香
zěn bù jiāo rén wèi nǐ xiàngwǎng
怎不教人为你向往

a wèn gūxiāng wèn gūxiāng
啊！问故乡 问故乡
bié lái shìfǒu wúyàng
别来是否无恙

wǒ shícháng shícháng dì xiǎngniàn nǐ
我时常时常地想念你
wǒ yuànyì wǒ yuànyì huí dào nǐ shēnpáng
我愿意 我愿意回到你身旁
huí dào nǐ shēnpáng
回到你身旁

měilì de cūnzhuāng měilì de fēngguāng
美丽的村庄 美丽的风光
nǐ cháng chūxiàn wǒ de mèngxiāng
你常出现我的梦乡

綺麗な河、青い山は小さな村に寄り添っている。青空に花の香、私の憧れのところ。その後お変わりありませんか？ いつもいつも故郷を懐かしがっています。故郷へ帰りた。美しい村、美しい風景、常に私の夢に現れる。

雅江という街を過ぎると道は草原地帯に入った。

標高が高いからだろうか、連なる山並みに樹木は全く生えておらず、すべて草原で覆われている。真っ青な空に浮かぶ白い雲。360度何処までも続く緑の草原。時々ヤクが群れて草を食んでいるのが見える。標高4000メートルを超えている場所とは思えない程、のどかな風景だ。スケールは違うが、昔バイクでツーリングした事のある九州、阿蘇の草千里の風景が思い出された。

この何処までも続く山岳草原地帯を何時間か走って、最後の峠を越えると眼下に広がる大草原の中に忽然と理塘の街が現れる筈だ。

三年前の旅でこの道をバスで走った時は、康定(成都?)の親戚を訪ねた帰りだという理塘の子供たちが私たちのバスに同乗していた。理塘の街が見えた瞬間、子供達が自分の街に戻ってきた喜びの叫び声をあげたのが印象に残っている。

その理塘の街が現れる瞬間をもう一度見たかったし、窓の外は眠ってしまったてはもったいない様な景色が広がっているのだが、なさけない事に、車に弱い私は自己防衛本能が働いてしまうのか、いつもバスに乗ると直ぐに眠くなってしまって目を開けている事ができない。いつしかまどろんでしまった。

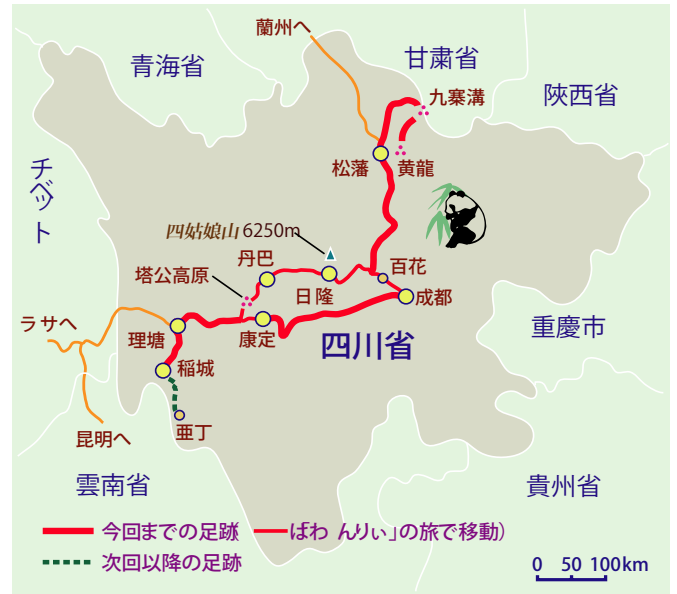


ガ、ガ、ガ、、、、突然悪路に入ったような、バスの揺れにうっすら目を開けると、やたらに埃っぽい街並みが見えた。あれ? 街だ・・・、うわ! 理塘!? もう着いちゃったの? 私が目を覚ましたのと殆ど同時にバスは理塘のバスターミナルに到着した。

前回、康定から同じ道を走った時には、理塘に到着したのは、たしかもう夕暮れだった。道路事情が良くなった為か、今回のバスの旅はいつも私が思っているよりずいぶん早く目的地に着いてしまう。時計を見るとまだ午後2時だ。バスを降りると、後部の荷物を係の者が降ろしているところだった。無造作に、地面の上に転がして置かれた私のザックは土ぼこりで真っ白になっている。

「ぎゃ〜っ!! 何これ〜!!」思わず声をあげる私に、係のおじさんは「大丈夫、大丈夫〜! ハッ、ハッ、ハッ・・・」と声をあげて笑っている。うわ〜ん! こんなじゃ、背負えん!!

ホコリだらけのザックはとりあえず脇に置いて、先ず例によって明日の目的地「稲城」へのバスチケットを買いに窓口へ向かった。チベット遊牧民の街「理塘」は魅力的な場所だが、帰りにゆっくり過ごすつもりだ。四姑娘山メンバーと別れたのは8月5日だったが、成都でぐずぐずし



ている間に既に8月の半ばに入っていた。高山の夏は短い。一日でも早く目的地の垂丁に急ぎたかった。

ところがである。稲城へのチケット買おうと窓口へ向かった私は、

「明日は稲城行きのバスはない。次のバスは明後日だ」

と言われ、愕然としてしまうのだ。

「えええ〜!! そ、そんな〜!!」

この期に及んで、また足止めかあ〜!? すると私の絶望的な顔色を察知したらしい服务员は思いがけない事を言い出した。

「急いでいるなら、今、裏に稲城行きのバスが止まっているからそれに乗って行きなさい。」

「ええ〜!! い、今あ〜!?」

「そうよ、急いで!! もう出るよ!!」

「は、はいっ〜!」

慌ててバスを降りた場所に向け戻り、理塘まで一緒だったスウェーデン人の彼女に挨拶する間も無く脇に置いてあったザックを抱え上げると、服をホコリまみれにして寝ぼけと長旅の疲れでぼんやりした頭をふりながら、服务员が指差した方向にバタバタ走る。な、なんでこうなるの〜!?

ゼイゼイ息をつきながら裏に回ると、なるほど道路に『康定—稲城』と書かれた大型のバスが止まっていた。おんぼろではあるが普通のバスだ。何じゃ、こりゃ〜! このバスも今朝、康定を出たのに違いない。最初からこのバスに乗ってれば良かったんじゃないか! 全く無計画な行動とは疲れるものだ。

こちらのバスは乗客も主に中国人旅行者と見られる人達が乗っており、先ほどまで私が乗っていたバスよりは

るかに普通で快適そうなのであった。でも、いいや。チベットの庶民バスは面白かったから。私の旅では快適さより面白さの方が重要だ。

稲城までは理塘からバスで三時間程だということだった。それなら日没前に稲城の街に着く事ができる。それにしても今日中に稲城まで辿り着く事ができるなんて思いもしなかった。さっきは慌てすぎて考える余裕もなかったが、そう思ったら胸がドキドキしてくるようだ。

稲城は今回の目的地、亜丁にアプローチする基点となる場所であり、前回の旅で最も印象に残っていた街でもあったのだ。この辺の土地はチベットの言葉でカムと呼ばれ、カムパと呼ばれる土地の男たちは大柄で勇猛な雰囲気だ。浅黒い顔に長く伸ばした髪、腰に大きな短剣をさした、まるで山賊のような男たちが練り歩く稲城の街に初めてバスから降り立った時は思わず

呆然としてしまった。それまでに通過してきていた理塘もカムパの街だが、その時まではバスで街から街へと移動するだけで、街の様子を見る機会などなかったのだ。

道端の地面に将棋版を置いて対局している街頭棋士の周りには見物人で人だかりができ、それぞれが次の一手をああしろ、こうしろと自分勝手にはやしたてている脇では、怪しげな漢方薬のような物が売られていて、何だろう？と覗きこむ私に、山賊のような男が親指を立て、これはいいぞ、お前買うか？というような仕草でニヤリと笑った。

何なんだ、この街は！すっごく面白いぞ～！と思ったのもつかの間、団体行動の悲しさで、その時もゆっくり街を見る時間は与えられず、人一倍好奇心旺盛な私はひそかにフラストレーションを溜めていたのだ。その時以来稲城は、私の中では憧れの幻の街だった。その街が、今、手を伸ばせば届くところまで近づいて来ていたのだ。



理塘まではただウキウキしていた私だが、ここまで来て急に気になってきたのは季節の移り変わりだった。前回訪れた三年前の7月の末には、道路の周りに広がる草原には色とりどりの高山植物の花が咲けるほどに溢れかえっていた。それが全く見られない。青くひろがる草原の草の色にも心なしかみずみずしさが感じられず、黄ばみは始める一歩手前なのではと思えてきた。もしかしたら……。もう夏は終わってしまったのだろうか。

今回目指している亜丁という場所は街ではなく山の中だ。夏でも夜になれば気温がかなり下がるために、ホカロンや羽毛のシュラフがなければ眠れないような場所で、自然保護区とされている場所の宿泊施設は只のテントだった。四姑娘山に登った時のキャンプ場でも私たちが今年最後の客で、この後キャンプ場は来年まで閉めるのだという話を聞いたことを今になって急に思い出し、にわかにな不安になってきた。

もう夏が終わっていて、亜丁の宿泊施設も閉まっていたら……。おそらくあそこに滞在する事は不可能だろう。それより、今の時期の亜丁はどんな様子なのだろう。下界の人間である私には、高山の世界は予測もつかない。ここまで来て、亜丁に行かれなかったら……。

理糖を出ると先ほどまで快晴だった天気はいつしか曇り空に変わっていた。バ

スは再び峠道を登り始め、車内の温度も再び急速に下がり始める。空気の冷たさが服を通してシンシンと染み込んでくるようだ。

前の席に座っていた中国人のおじさんがザックから真っ赤なジャージをとりだし着込んでいた。峠の尾根道を走っている時、誰かがトイレに行きたいと車掌に告げたらしくバスは一時停車すると、男性はバスの左手、女性は右手方向に下りてそれぞれ用をたす。いつの間にか雨が降り出していた。

身を切るように冷たい風がビュービュー吹き、気がつけば雨の中には雪が混ざっている。用をたしている目の前の地面も凍りつき、ところどころに雪が薄く積もっていた。うわ～ん！やはり高山ではもう夏は終わってしまったのか。不安が的中してしまったような気分が一気に悲しくなったが、もうここまで来てしまったのだ。なるようになれ。

稲城に着くまでの道中はドキドキしたり、不安になって悲しくなったり、開き直ったり、まるで遠くに住んでいる恋人に会いに行くような気分だ。今から思えばやっぱり私はあの土地に恋をしていたのかもしれない。旅先で出会って淡い恋心を抱いた人が忘れられずに再び会いにきてしまった。そんな風といえばあの時の私の気分ぴったりくるような感じだ。土地に恋をするなんて変だけど、本当にそんな気持ちだった。

(つづく)

稲城の男 前回、稲城を訪れた2003年に撮影

太郎の子ども図書館を作りたい X 『遂に完成、そしてオープニング』

建設再開の村の14日間 (2006年11月20日～12月3日)

安井清子

ラオス山の子ども文庫基金

太郎の図書館・建物完成しました。

ラオス・シェンクワン県・ノンヘート郡・ゲオバトゥ村に、この3月ようやく図書館の建物が完成しました。2005年11月から半年滞在し、ようやくと柱を立て屋根を葺いたところまでで、雨季・農繁期となり一時中断。そして2006年11月より再び、鈴木晋作と安井清子が滞在し、村の人々と一緒に建設作業を再開しました。

2月18日に、日本から竹内桂子、横須賀和江さん、ラオス国立図書館の館長であるコンドゥアンさんたち、郡の役人達にも参加してもらい、村の人々とともに、盛大にオープニングを祝いました。図書館を担当する村人も決まり、これから、山の図書館活動が始まろうとしています。壁に飾った太郎さんの写真が、今後の活動を見守ってくれるでしょう。

その後、残りの作業を終え、3月初めに建物は完成しました。でも、実際の活動はまだまだこれからなので、今後もしばしば訪問して、山の村ならではの図書館活動が生まれ、根付くことを目指して頑張りたいと思います。本当に応援有難うございました。どうぞ今後ともよろしく願いいたします。

2007年3月 ラオス山の子ども文庫基金



●2月18日(日) オープニング

朝から準備。村の小学校から机や椅子を運んできてもらう。また、スピーカーやアンプなども学校から借りる。村在の校長先生であるチャウーは、クリスマスのイルミネーションみたいなチカチカの電飾まで持ってくる。とにかく、めでたく派手なのはいいじゃないか！

テープカット用のテープはヴィエンチャンからリボンを買ってくるのを忘れたのだが、コンドゥアンさんが「そんなの買う必要ないわよ。モンの帯があるでしょ？あれを2～3本糸でつなげるの。帯を切るんじゃなくて、つないだ糸を切ればいいのよ」とアドバイスしてくれたので、ニア・ノーポーからピンクと緑の帯を借り、テープカットの準備などをする。

ノンヘート郡からは、郡文化局長と副局長（でも二人しか局員がない）、教育局長、保安局長などが来て下さる。招待状は渡したものの、本当に来るかなあ？とか思っていたので、嬉しかった。

予定の10時を少し遅れてオープニングスタート。風と日差しが強い中、大勢の子どもたちと、大人たちが集まった。マイクを握るのは郡・文化局長のジュアタイ・リー氏。太郎さんのテレビ取材の時もお世話になった。

ソムトン氏が、太郎の図書館ができることとなった経緯を説明する・・・太郎さんが、テレビ番組取材の海外初仕事で、この村に来たこと・・・「いい村だったよ。年とったらあんなところに住んでもいいな」と、この村の印象をお母さんに語っていたこと・・・その後、残念なことに事故で亡くなったのだけど、その後お母様の気持ちで、この図書館ができることになった・・・ということなど・・・

ソムトンさん本人はモンであるが、このような公式な場では、ラオス語で進行するのが普通である。本人がラオス語で話し、自分でモン語でも話せばいいのに、格好をつけたいのか、ここでは、ソムトン氏、自分でラオス語原稿を読み、もう一人にモン語に訳した原稿を読んでもらっている。ところが、彼はモンであるから、いつのまにか、自分でモン語を話していたり・・・と、ごちゃまぜになって、ハッと気がついては、自分でも笑っている。

ノンヘート郡、教育局長カンパー先生の挨拶、ラオス国立図書館長、コンドゥアン先生の挨拶、そして、安井の挨拶・・・そして太郎さんのお母さんの挨拶・・・と続く。

私自身、朝少し早く起きて寝床の中で挨拶を考えた。とにかく、太郎さん、お母さん、村の人たち・・・いろいろな出会いと協力があってこの図書館ができたのだということ・・・そして、図書館には二つの目的・・・一つは子どもたちが絵本やお話を通して、新しい広い世界に出



マイクを握るのは郡・文化局長のジュアタイ・リー氏



小屋の中に太郎さんの写真を飾った。ガラスの入った明るい格子戸になっている。



くじ引き風景

会ってほしいのだということ・・・もう一つはモンの文化や大切なものを次世代に伝えるために使ってほしいのだということ・・・などを、下手なモン語とラオス語で話した。村の人たちも頷いて聞いてくれていたので嬉しかった。

太郎さんのお母さん、桂子さんのご挨拶は、私は横で聞きながら、自分で泣きそうになりながら、訳していた。お母さんも涙ぐんでいらっしやるようであった。太郎さんはもういないけれど、ここにはたくさん子どもたちがいるから、みんなに家を使ってほしい・・・とおっしゃる。そして、テープカット。

図書館の中には、太郎さんの写真を飾った。村で取材していた時の写真である。本当にやさしい面差しをしている。この太郎さんのおかげで村に図書館ができた。太郎さんに見守られ、一緒にこれから図書館を使っていくのだ。みんな写真に見入っている。

お昼は、村のみんなを招いての食事・・・爺さんの家にとろ狭しと人々が入り、食べている光景は壮観であった。そして、余興のくじびき・・・景品は実は古着である。(先日、ラオス滞在の長い友人が日本に帰り、自分の服をたくさん置いていった)・・・上等な服もあり、オンボロもあるが・・・村の76戸の名前を村長が一人一人呼び、くじを引く。図書館の外では、大人たちは押し合いへしあい目を輝かせて、くじびきに盛り上がっている。

ふと振り返ると、子どもたちはくじ引きよりも絵本！と、さっそく大勢が小さな図書館に入り込んで、絵本のページをめくっている。中学生たちは、さっそく登録カードを書いて、本を借りている。教科書を借りたいのである。所狭しと子どもたちがひしめきあって、本に見入っている・・・そんな光景が嬉しいオープニングであった。

小屋の中では、くじの興奮をよそに、子どもたちが絵本に見入っていた。

(安井清子)



小屋の中では、くじの興奮をよそに、子どもたちが絵本に見入っていた。

オープニングの様子は、ラオス山の子ども文庫基金のHPから、安井清子さんの許可を得て転載しました。‘わりい’HPにリンクしてありますので、ご訪問くだされば現地の楽しい様子を知ることができます。

【‘わりい’の原稿を募集しています】

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報‘わりい’は、会員の皆さんから寄せられた原稿でまとめられています。体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど気楽にお寄せいただければと願っています。皆さんの投稿をお待ちしています。

*紙面が16Pと限られていますので、掲載まで暫くお待ち頂くことがあります。また、紙面の都合で作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもあります。

キャンディロードのカシューナッツ娘

コロンボからキャンディに向かって国道1号線(キャンディロード)を55kmほど進んだところにガジュガマという小さな村があります。シンハラ語で、ガジュはカシューナッツを、ガマは村を意味します。沿道の風景を見ながらキャンディまで旅をするだけでも楽しいのですが、運の良い人は更にサル使い、ヤマアラシ使い、ヘビ使い等の大道芸人にも遭遇する事が出来ます。残念ながら大道芸人達と遭遇出来なかった人でも、ガジュガマでは必ずキャンディロード名物のカシューナッツ娘に会う事が出来ます。今回はこのカシューナッツ娘を紹介します。

ガジュガマはその地名が示すようにカシューナッツの産地で、産地直売をしているのが今回の主人公の娘さん達です。娘さん達はカシューナッツ農家の娘や御上さん達で、国道両側の約100m程の範囲にそれぞれが手造りの売店を設け、ご自慢の衣装を着て自家製の小さなパック入りのカシューナッツ菓子売っています。

小田原あたりの魚の干物直売店をイメージして下さい。お店の人が干物を片手に、手招きをしてお客を呼び込んでいるのと同じで、カシューナッツを片手に手招きをしてお客を誘います。これだけではスリランカの道端でよく見かける果物や野菜売りと変わらないのですが、カシューナッツ娘の場合は衣装が違います。

スリランカの女性は肌があらわになるような服装はしないのですが、カシューナッツ娘はかなり大胆な露出度の大きい服装をしています。中には胸の谷間を覗き込めるのではないと思われるような服装をした女性もいます。外国人の目から見ればどうという程度ではありませんが、入国の際に日本の週刊誌を持っているのが見つければ、ヌード写真を切り取られるか、週刊誌自体を没収される様なお国柄なので、この様な服装はスリランカでは驚異的な事なのです。スリランカ女性としては大胆とも言える格好をしてでも、ガジュガマの女性達は特産品を売って少しでも現金収入を得ようと働いています。

お客は外国人観光客よりも、スリランカ人の方が多いと思われます。キャンディ詣でのスリランカ人や毎日のようにガジュガマを通る定期バスやトラックの運転手と乗客です。運転手達にはそれぞれお馴

染みの娘がいて、軽口を交わしながら値段交渉無しにカシューナッツを購入して素早く立ち去りますが、一族や友人達とバスを仕立ててのキャンディ詣での人達は購入するのに時間が掛かります。

少しでも長くカシューナッツ娘と話をし、眺めていたい為に長々と値段交渉を繰り返します。この間、バスに残っている人達からは冷やかし声が飛び交います。交渉の拳句に市価の倍以上の高値と知りながら大量に購入している様です。拝観料込みの値段なのでしょう。普通の乗用車の人達だけでなく、運転手付きの高級外車の後部座席に座っている紳士さえも、気に入った娘のそばに車を止めさせて同乗の女性の冷ややかな視線を浴びながらもカシューナッツを購入するために車から降りてきます。

カシューナッツ娘達が商品を売る為に媚びている様に感じられるかもしれませんが、彼女達からはいやしさは全く感じられません。寧ろ、ライバル達よりも少しでも目立つ格好をして、より多くの特産品を売りたいという逞しさと、あつけらかんとしたお色気が感じられます。

残念な事に、最近ではカシューナッツ娘の数が減ってきたように感じます。やはり後継者不足なのでしょう。娘達の年齢も少しずつ上がってきたようです。1990年代には娘さん達が車道の真ん中まで飛び出てきて無理矢理に車を止めていたものです。

娘さん達の客引きの声、お客との値引き交渉の声、野次馬達の冷やかしの声、その様子を撮影する外国人観光客などが入り乱れて、それはそれは賑やかな光景でした。最近はこのほどの賑わいはありませんが、それでもカシューナッツ娘達は一生懸命にカシューナッツを売っています。スリランカを訪問された際に、キャンディロードを利用する機会がありましたら、是非ともカシューナッツ娘との会話を楽しんで頂きたいと思います。

キャンディロードだけでなく、各地の道端ではドリアン、マンゴスチン、ランプータンなど旬の果物の売店、シンハラ語でタンビリと呼ばれるキングココナツの果汁の立ち飲み屋、もぐりの濁酒屋などが出現しますので、これらの店を見つけた時には、旬の味と売り子との会話を楽しんで下さい。

【活動報告】 2007年4月15日(日) 参加者22名

h é yuányuán xiànr bǐng
〈何媛媛さんと餛飩餅で交流しよう!〉

‘わんりい’紙上に興味深い中国の文化をいろいろご紹介くださった何媛媛さんと一緒に‘わんりい’のメンバー達が餛飩餅作りに挑戦しました。

餛飩餅は餃子同様、粉食が多い中国の東北部から内モンゴルにかけてごく当たり前にどこの家庭でも食され、街かどの屋台などでも売られています。しかし、餃子は日本のどこでも頂けるのに、餛飩餅は滅多に出会うことがないのです。一度‘わんりい’でも作って皆で味わってみたいと、何さんをお願いし交流会の運びになりました。

簡単に言えば、捏ねた小麦で肉餡を饅頭風に包み、押し潰して、油を引いた鉄板でこんがり焼いただけなのですがそれがめっぽう美味しいのです。特に、肌寒くなり始めた頃、空腹の折に中国の街かどの屋台などで売られている焼きたての餛飩餅を買ってかぶりつくのは堪えられません。



大鍋で山ほどの肉餡を作る何さん

交流会では中国香料をたっぷり加えた何媛媛さん肝いりの本場もん餛飩餅のほか、什錦粉糸冷拌、ピータン豆腐、五香豆のお粥、今どき珍しい手づくりの元宵などなど7種類の中国菜を何さんと‘わんりい’のメンバー14名が作り、8名+幼児2名の食べるだけの

お客さんを迎えて楽しみました。(田井)



準備完了



本場もんの餛飩餅を食べたいと見えた満柏画伯の家族

作ってみませんか、とても美味しい〜 餛飩餅 xiànr bǐng

直径12cmの餛飩餅7、8個分として

【材 料】 小麦粉 500g 豚挽き肉 200～250g
白菜1/4 薺 1束 葱 半本、生姜 一片

【調味料】 花椒(香付け)大匙1程度 サラダ油 醤油
塩 酒 味の素 ごま油

*手に入れば餃子、包子用の調味料(註)を使用するとよい。
註：中国では十三香又は麦堡牌の調味料がよく使われている。今回は十三香を使用。

【作り方】

▶皮：

打ち粉少々を残し、小麦粉にぬるま湯を少しずつ注いで捏ねる(餃子の皮より柔らか目)。ラップ又は濡れ布巾を掛けて30分ほど寝かせる。

▶餡：

- 1) 白菜 葱 生姜 薺などごく細かく切る。
- 2) 白菜は塩を少々を振って暫く置き、織り目の洗い布巾(蒸し用布巾)に包んで白菜の水分を全て搾り取るような気持ちでしっかりと絞る(コツ1)。
- 3) 鍋に油と花椒を入れ、花椒が黒くなったら、花椒を取り出し、挽き肉を入れて軽く炒め、挽き肉の色が変わりはじめたら、火を止める(肉の粘り気を残す。コツ2)。

- 4) 上記に醤油、塩、料理酒、葱、生姜、味の素及び十三香などを加え、よく混ぜ合わせる。
- 5) 用意の白菜を加え、良く混ぜ合わせて味見して塩味が不足ならば塩を加える。(日本の醤油は味が薄いのであまり多く使用しない)
- 6) 餛飩餅に包む直前に、薺、ごま油を加えてよくまぜる。

▶仕上げ：

- 1) 捏ねて置いた餛飩餅の種を赤ちゃんのコブシ位の団子に丸め、面棒で伸ばして(周りを薄く真ん中は厚めに)、用意の餡をたっぷり(種とほぼ同量)肉まん状に包む。
- 2) ホットプレートの中温で暖め、油を大匙1ほどを広げる。肉まん状にまとめた餛飩餅を置き、フライ返しで押すようにし、1.5センチ程の厚さに押し潰す。
- 3) 中温で、焦げないように両面をそれぞれ3回ぐらいひっくり返して約5、6分焼く。

●5月定例会 5月15日(火) 田井宅 13:30

●おたより発送日 5月27日(日)

鶴川市民センター・第二会議室 15:00～

—— どなたでもご参加で来ます ——

“あさおサークル祭り2007”で会いましょう!

2007年5月19日(土)/5月20日(日)

あさおサークル祭では麻生市民館を利用して活動しているそれぞれのサークルが、日頃の活動を発表します。
‘わんりい’も毎年、趣向を凝らした催しを企画し参加しています。皆様のご参加をお待ちしています。

【視聴覚室】

●5月19日(土) 10:30～11:30 参加無料

「天空の花園・四姑娘山の花々」(スライド)

解説：河本義宣(‘わんりい’会員)

「幻の青いポピー」といわれるブルーポピーの外、標高4000mの高地に咲く美しい花々の写真を大型スクリーンで見ることができます。

●5月20日(日) 10:30～12:00

楽しく歌おう! 中国語の歌!! 参加：無料

「**幸せなら手を叩こう**」

(如果感到幸福你就拍拍手)

指導：趙鳳英さん(中国人歌手)

誰でも知っている楽しい歌「幸せなら手を叩こう」を中国語で歌えるようになりませんか?

【大会議室】

●5月19日(土) 14:30～16:00

「**TOKYO 万馬馬頭琴アンサンブル**」演奏

*参加無料

【予定演奏曲目】・昇る太陽・スーホの白い馬・回想曲・草原賛歌・藍色の子守唄・運命・万馬のとどろきなど

【演奏】西郷美炎子、高木和恵、永瀬征博、池谷禎俊
昨夏、内モンゴル自治区フフホト市で演奏し、馬頭琴演奏関係者達より高く評価された「TOKYO 万馬馬頭琴アンサンブル」の皆さんによる熱い演奏を是非



‘わんりい’外のサークルなど詳細は、同封チラシをご覧ください。

第3回日本中墨会水墨画展 【入場無料】

‘わんりい’にお馴染みの中国人画家・満柏さん指導の
水墨画教室連合の展覧会

於：相模原市民ギャラリー (☎：042-776-1262)

(JR横浜線・相模原駅ビル4F)

時間：2007年5月10日(木)～14日(火)

10:00～17:00(初日13:30より 最終日15:00まで)

古筝と十三弦のオープニング・ミニコンサート

5月10日(木) 13:30～ 於：上記会場

古筝：大島 薫 十三弦：牧 歌恵美

問合せ：事務局 電話：042-757-9518

e-mail：manboinsea@yahoo.co.jp

〒229-1123 相模原市上溝 1252-15

【ご予約下さい】 ‘わんりい’料理講習会

インドネシアのカレーは真夏の味!

6月16日(土) 11:00～14:00

於：麻生市民館 参加費：2,500円(会員：2,300円)

講師：ROSALITA(ロサリタ) 定員：30名

(和光大学バンパルディアント助教授夫人)

インドネシアのカレーは、インドカレーともタイカレーとも一味違います。カレー(カリ・アヤム)のほか、バナナの皮で包んだインドネシア風チマキ、甘いインドネシアデザートなどなどで夏向きホームパーティは如何ですか?

中国の楽器-その音の広がりその4

中国の琴とコリアの伽倻琴(カヤグム)そして打楽器

2007年6月3日(日) 14:00開演(開場13:30)

於：HAKUJU HALL

代々木公園駅(千代田線) 代々木八幡駅(小田急線)徒歩5分

5500円(当日：6000円) 全席指定

出演：姜小青(古筝) 朴順雅(カヤグム) 馬平(中国打楽器) 朴根鐘(チャンゴ・テグム)

予定曲目：・ムカームの散序と舞曲(古筝) ・夜深沈(古筝・太鼓)・沈香舞(カヤグム) ・トラジ(カヤグム・チャンゴ)・チャングムの夢(合奏)

主催：ラサ企画

予約&問合せ：ラサ企画 TEL/FAX：03-5748-3040

第34回相模原市民若葉まつり

5月12日(土)午後1:00～午後5:00時

5月13日(日)午前10:00～午後5:00時

(歩行者天国は両日とも午後5:30まで)

国道16号から市道下九沢淵野辺までの市役所さくら通りほか

詳しくは<http://www.e-sagamihara.com/> ここをクリック

‘わんりい’お馴染みのアフリカンコネクションが展覧します。アフリカンコネクション：にぎわいゾーン/ブース番号167 ・ケニア料理とアフリカンアクセサリー及びタスカビールなどを販売します。

定例会、おたより発送日は15Pにあります。